

第二言語としての日本語における漢語系形容動詞の 習得研究：プロトタイプ理論の観点を中心に

毛, 莹

<https://doi.org/10.15017/1441001>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

論文審査等の結果の要旨

本研究は、形容動詞論が品詞の枠組み全体に関わる問題であるという基本的認識に基づき、プロトタイプ理論の観点から漢語系形容動詞の習得を分析した上で、日本語教育への示唆を試みている。

第一章では、語彙研究の観点から、形容動詞のカテゴリーとしての特徴を、形容動詞という品詞自体の位置づけ、種類、歴史的変遷、漢語語幹、連体形など様々な角度から考察した上で、形容動詞カテゴリーと名詞カテゴリーの間の境界に曖昧性が生まれたプロセスを、特に、断定の助動詞「だ」との繋がり、連体形「な」の形成、語形及び品詞性の形成という歴史的変遷から明らかにした。その結果、形容動詞に特有の連体形「な」の形成は助動詞「だ」の形成過程と並行したものであり、両者とも空間概念に基づくメタファーの拡張によって成立したものであることを示した。また、形容動詞は「もの概念」と「空間概念」の結合から「状態概念」への意味変化を通し、抽象名詞から分離したものであることも明らかにした。さらに、形容動詞カテゴリーは統語的のみならず、意味的観点からも、名詞カテゴリーと深い関係を持っていることを示した。

第二章では、理論研究の観点から、プロトタイプ理論の誕生、特徴、理論の発展及び不足点などを解明した上で、動的文法理論を援用した。さらに、第三章では、両理論の内容を統合した上で、形容動詞カテゴリーが示す意味的特徴と統語的特徴を分析した。すなわち、意味的には、形容動詞カテゴリーは「性状概念」の典型性の変化に伴い、名詞カテゴリーにまで拡張したが、その影響で、形容動詞カテゴリーの語彙メンバーが示す意味的特徴は同質ではなく、「性状概念」の強弱の度合いが異なると考えられる。それに対して、統語的には、抽象名詞カテゴリーの拡張は名詞が示す統語的特徴の典型性の変化に伴い、形容動詞カテゴリーに至った。それゆえ、形容動詞は統語的に抽象名詞と類似点が多く見られる。

第四章では、習得研究の観点から、日本語の漢語系形容動詞の習得について調べた結果、まず、母語を問わずすべての学習者が形容動詞を習得する際、語彙メンバーの典型性変化が語彙の習得に影響を及ぼすことが分かった。また、名詞に関わる文法性判断テストと比べ、連体形「な」の文法性判断テストの正答平均値が最も高いことから、学習者は形容動詞を習得する際、「な」の使用が基本であることを意識しているが、名詞の文法用法に干渉を受けるため、典型的な形容動詞の習得が定着してから、非典型的なものへ進んでいくという習得順序が推測できる。第五章では、日中同形語による語彙の品詞性判断及び「の」の過剰使用による誤用から見ると、中国語を母語とする日本語学習者は漢語系形容動詞を習得する際、他言語を母語とする日本語学習者より母語転移の影響を強く受けている傾向を明らかにした。第六章では、形容動詞の出現頻度、学習者要因及び指導法、習得環境といった、母語転移以外に形容動詞の習得に影響を与えると思われる要因を分析した結果、中国語を母語とする日本語学習者が日本語の形容動詞を習得する際や中国語を母語とする日本語教師が日本語の形容動詞を指導する際には、連体形「な」の使用に焦点を当てるばかりで、名詞との関連性には注意を払っていないことが推測できる。

第七章では、以上の結果を総合的に考察し、日本語教育に関して以下のような新たな指針や指導法を示唆した。まず、日本語学習者に形容動詞の習得を指導する際には、形容動詞カテゴリーに備わる典型性と習得順序の関連性、すなわち、学習者はその母語の如何を問わず、典型的な形容動詞から非典型的な形容動詞という順序で習得するということを認識した上で、学習者にはまず典型的な形容動詞を十分にインプットし、その後名詞と共有する統語的特徴を加えた上で、学習者自らが

非典型的な形容動詞を自然に導き出せるような効果的な指導法を確立すべきである。また、学習者には、形容動詞カテゴリーに属する語彙メンバーの典型性の変化による統語的特徴の区別を段階的に強調する必要がある。具体的には、形容動詞カテゴリーにおける、より名詞的なものと、より形容動詞的なものを区別しながらその文法用法を例示することである。さらに、中国語を母語とする日本語学習者に漢語系形容動詞を教える際、日中同形語による語彙の品詞性判断及び「の」の過剰使用による誤用の可能性を念頭に置くと指導がスムーズに進むと考えられる。

以上のように、本論文は日本語における漢語系形容動詞を語彙研究、理論研究、及び習得研究の様々な観点から調べ、さらに綿密な先行研究の精査と実験調査及びコーパス調査による豊富なデータをもとに、第二言語としての日本語の漢語系形容動詞の習得を解明し、さらに、調査の結果をもとに形容動詞の指導に新たな示唆を加えたものであり、研究と教育の両面で貢献できるものと高く評価できる。よって、調査委員会は本論文が博士（比較社会文化）の学位を授与するにふさわしいと判断した。

試験又は学力確認の結果の要旨

甲 第 号 氏 名 毛 瑩

調査委員
主査 志水俊広
副査 山村ひろみ
副査 松村瑞子
副査 西山 猛
副査 奥野由紀子

試験又は学力確認の結果の要旨

2014年3月10日午後3時より午後5時まで、九州大学伊都キャンパス比較社会文化言語文化研究教育棟320号室（第2セミナー室）において、毛瑩氏の博士論文公開審査を開催した。最初に申請者が博士論文の概要を説明し、続いて質疑応答が行われた。申請者は質問に対して的確に回答し、説明を補足した。

以上の公開審査の結果に基づき、申請者は博士（比較社会文化）の学位を授与されるものとして十分な学力を有すると判断された。よって、調査委員全員一致で申請者が最終試験に合格したものと認定した。